天声人語

11

1985・1～1988・8
昭和60年　昭和63年

辰濃和男

朝日文庫

辰濃和男（たつの　かずお）
1930年（昭和５年）、東京生まれ。東京商大（一橋大）卒、社会心理学専攻。朝日新聞社会部、ニューヨーク特派員などをへて論説委員として「天声人語」執筆。現在編集委員。著書に『反文明の島』（朝日選書）、『天声人語』〔自然編〕・『天声人語』〔人物編〕（朝日新聞社）、『天声人語』９・10（朝日文庫）。

天声人語　11　　朝日文庫

1989年５月20日　第１刷発行　　定価420円

著　者　辰濃和男

発行者　八尋舜右
印刷製本　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104-11 東京都中央区築地5-3-2
電話　03(545)0131（代表）
編集＝図書編集室　販売＝出版販売部
振替　東京0-1730

© KAZUO TATUNO 1989 Printed in Japan

ISBN4-02-260091-8

五　11

江苏工业学院图书馆
藏书章

1985.1～1985.9

辰濃和男

朝日文庫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

表紙・扉　伊藤鐵治

目次

1985 昭和60年

日記帳13　非暴力主義14　二十歳前後15　言葉の行革17　親子心中18
議長の出処進退19　菅原道真会見記21　「幼い難民を考える会」22　金次郎と庄助23　すみだ第九を歌う会25　日本人の「せかせか度」26　雛28
情報公開策29　野上弥生子さん死去30　ブギウギの時代32　新幹線公害訴訟33　二人の大発明家35　家婦長の時代へ36　宅配弁当37　見せかけの貯蓄率39　母の勇気40　文机42　スパイ防止法案43　包む44　防衛費への不安46　徳島ラジオ商殺し事件無罪47　石垣島新空港計画48　にせがき『犬枕』50　捕鯨禁止へ51　「銀河鉄道の夜」53　つないだ手54　上海の開放ぶり55　日航ジャンボ機墜落57　首相の靖国公式参拝58　従軍慰安婦59　知能ロボット61　珍釈・一茶句集62　夜来香64　残留孤児来日65　白好み66　体罰68　土地無策69　阪神タイガース快調70　オジサン族72　オバサン族73　ウェルズとブリナー74　やらせと自己演出76

制服77　読書と経験79　丸刈り訴訟80　大潟村ヤミ米検問所82　定数是正83　サハロフ博士の主張84　ゲル86　川柳87　'85年の貝88

1986 昭和61年

お年玉93　紅白視聴率低下94　偽「折々のうた」95　おしゃれな遺言97　野鳥の受難98　チャレンジャー炎上99　五百億ドル101　女性マンガ誌102　勝小吉から学ぶ103　池上の茶室105　おごれる者の悲劇106　東京大空襲108　ハレー彗星109　ホテル倒壊救出作業110　「戦争の教え方」112　マルコス疑惑113　菩薩たちの微笑115　厚木騒音訴訟判決116　穀雨117　昔話「カザミドリとだんご」119　千鳥ケ淵戦没者墓苑120　元上野動物園園長死去122　チェルノブイリ原発事故123　台湾の郷土資料124　現代のノラたち126　プライバシー銀行127　身をさらす勇気129　「アレキサンドリアWHY？」130　父親の透明人間化132　パソコン通信133　しゃれと冗談134　機械の警告136　『防衛秘密白書』137　新自由クラブ解散138　大本営発表の詐術140　原発安全神話への疑問141　命の森142　「閣僚資産不透明公開対策」144　社会党委員長選145　中曽根流政治手法147　藤尾文相罷免148　葉落帰根149　『議会

答弁心得帖』151　中曽根首相失言152　騒音ヤジ153　野菊155　生活の根にある南の文化156　伊豆大島噴火158　ララ物資159　地価暴騰160　『藪の中』間接税編162　軍事費一兆ドル時代へ163　群読教育165　売れるスキャンダル166　若者たちの「とりあえず」167　太めのサンタ169

1987 昭和62年

アマミノクロウサギ173　おしゃべり人形174　蠟梅175　オーケストラの危機177　昭和基地三十歳178　防衛費一%枠179　節約精神181　うそつき道182　鴨184　エイズ対策185　納税者の反乱186　東京空襲・四十二年188　『異文化適応教本』189　脱集団旅行派190　「たいこどんどん」192　大阪主義193　最後の汽笛194　木に聞け196　四字熟語197　いじめ199　市民運動200　馬酔木201　阪神支局襲撃203　地上げ屋204　快刀乱麻的苦言205　点訳絵本1207　贅沢な精神208　命どぅ宝209　型なし社会211　水金梅212　『死への準備日記』214　善意の利用215　横田基地騒音訴訟216　「甲子園への遠い道」218　遷都論219　大暑220　点訳絵本2222　一冊の本223　岸信介の限界224　薬学の現場226　超伝導227　迷路遊び228　全国方言大会230　錯覚

を利用した商品231　三宅島訓練場233　われさき症候群234　新国劇終幕235
バイオ培養237　女性彫刻家カミーユ238　新宿の婦人相談員239　ヒロシマの記録映画241　名古屋本社単身者寮襲撃242　『平凡』廃刊244　次期総裁・竹下登245　アーミッシュ246　秋の深まり248　農場の少年たち249　雑報的人物論250　現場主義者の死252　川久保玲さんの人気253　街の散歩道254　機知に富む冗談256　公共の手水場257　在日米軍基地経費259　ＩＮＦ全廃条約調印260　ジャイアントセコイア261　盧泰愚新大統領263　「馬鹿一の夢」264
難民救援全国行脚266　男優女立の時代267

１９８８　昭和63年

南鳥島の夜明け271　本当に幸せですか272　北斗の光273　蜂谷真由美275
ビル街のハクセキレイ276　オーストラリア建国二百年278　トカミタイことば279　政治家と株１280　浜田幸一予算委員長282　節分草283　胃がん集団検診の父285　子どもたちの俳句286　寛永の雛人形287　三本の欅289　カバの大太郎と京子290　問答有用291　青函連絡船最終便293　此岸の心294　『ビキニの海は忘れない』295　伊藤栄樹検事総長297　「真珠貝のジナイーダ」298

田谷力三さん死去 299　コウノトリ人工繁殖成功 301　指導要録 302　花見 304
瀬戸大橋開通 305　張海迪さん 306　田宮虎彦氏自死 308　中村勘三郎死去 309
盗採 311　「芙蓉鎮」 312　言論の自由への旅 313　おふくろの心 315　岩手の
「早春」 316　銀座のカラス 317　自衛官合祀拒否訴訟判決 319　無謀運転 320
森の深い闇 321　見えざる兵器生産 323　スイスの山歩き 324　池上の茶室・続
326　魚博士・末広恭雄氏死去 327　警察官拾得金横領事件 328　フロンガスと
地球の運命 330　「さくら隊散る」 331　潜水艦なだしお 333　柿田川 334　政
治家と株2 335　オケクラフト 337　平和祈念コンサート 338　早池峰 339　人
と犬 341　黙想 342

「天声人語」の十二年余 344
あとがき 348

カット・邊見泰子

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

天声人語　11

1985

昭和60年

マンサク

日記帳　＊1・6

「初日記いのちかなしとしるしけり」（久保田万太郎）。毎年のことだが、茫（ぼう）とした日記帳のページを繰りながら、これから一年、いかなるいとなみが記されるのかと思う。そんなに熱心に書くわけではない。一年が終わってみればきまって余白だらけの日記帳が残ることになっているのに、性こりもなく、日記帳を買う。日記とはふしぎなものだ。

作家の野上弥生子さんは、明治のころからもう八十年以上も日記を書き続けているそうで、その根気には脱帽するほかはない。たとえば震災前後の日記を拾い読みしただけでも、それがいかに貴重な民衆史、世相史であるかがわかる。

小田切進さんは『近代日本の日記』の中で、一葉の日記は主として恋愛日記であり、独歩の日記は「明治の恋愛を描いた稀有の文学作品」だと書いている。

一葉日記には「胸はただ大波のうつらん様に成て」「いふべき事も覚えず問ふべき事も忘れて面ほてり」という表現がでてきて、明治の青春がなまなましく伝わってくる。

そこには「自己のいっさいを日記に投げだし、自己を赤裸々にして、苦悩や不安から自己脱出をはかるいとなみ」がある。日記の中のそういういとなみを通じて、一葉はやがて名作『たけくらべ』を生むにいたる、と小田切さんは書いている。

独歩の日記は当世のＣＭ風でおもしろい。「唱歌、低語、漫歩、幽径、古墳、野花、清風、緑

光、蟬声、樹声、而して接吻又た接吻」。この恋愛日記を下地にして『武蔵野』が生まれる。作家にとっては、日記は心の記録であると同時に、文章修練の場であるのか。夢中になるものをもつこと、恋をすること、これが日記を書き続けるこつらしい。

池波正太郎さんは、ここ二十年来、毎日の食べものを欠かさず日記帳につけている、というからこれも脱帽ものだ。池波さんの作品にこまやかな季節の味がでてくるのは、この心入れのせいかもしれない。

非暴力主義　＊1・11

一九六四年（昭和三十九年）、ニューヨークのハーレムで黒人暴動が起こった時、人びとは興奮の極にあった。「武装して警官と戦え」という騒ぎの中で、一人の指導者がいった。「われわれは非暴力主義を貫いてこの流血の惨事を終わらせよう」

いきりたった群衆が指導者に殴りかかろうとすると、七、八十人の聴衆がごく自然に指導者を取りまき、敵意に満ちた男たちを退けた。七、八十人はその後、街頭にでて傷ついた人を助け、警官にも暴力中止を訴え続けた。指導者B・ラスティンは「あの時、私は非暴力主義の強さを知った」と回想している。

米国には非暴力主義の根深い伝統がある。『森の生活』を書いたソローがいる。トルストイやガンジーでさえも、アメリカの非暴力思想の影響をうけたことを認めているほどだ。

①報復をしない、②良心の声をきき、服従すべからざるものには服従しない、③直接行動で訴える、④愛の心で世の中を変える。アメリカの公民権運動や徴兵拒否運動の底にはこの非暴力主義の四原則があった。

非暴力主義を説き続けた日本山妙法寺山主の藤井日達氏が亡くなった。「不殺生の教えこそが現代を救う」「全人類を滅ぼす核戦争をくいとめるのが仏教徒の使命」といい、晩年まで平和行進の先頭に立った人である。

その教えは、アメリカの非暴力主義やガンジーの教えとよく似ているが、不殺生という言葉には、古来の伝統がしみこんでいる。ガンジー翁も日達翁も共に「歩く」という行為を友とし、直接行動の手段とした。二本足で歩くという人間の自然な、根源的な行為を大切にした点で、両者は徹底した反物質文明論者だった。

非暴力主義は、この国ではしばしばあざけりの対象になり、夢想論と揶揄される。だが三十五年前の日達氏の次の言葉には今も新鮮さがある。「文明とは電灯のつくことではない。原爆を製造することでもない。文明とは人を殺さぬことである」

＊'85・1・9死去　99歳。

二十歳前後　＊1・15

はたち前後のころ、作家の五木寛之さんは、ゴーリキーを読み、深夜羽田空港のバーで働き、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor